夢心地

冷たい風
遠く小さく
家族は———

規則正しく並ぶまだら雲に
生を失う時
こんな哀しみが愛しさへと続く

慄える僕は夢を見た
誰かが僕を追っていた
かすかな嬉しさと、そして和やかな大気

海の見える席で窓に首をもたれ
白とブルーの電車は
うとうとと心地良く揺れる

僕は夢の中で想っていた
もしこれが覚めることなく続くなら
生というものは存在しないだろうと

(1992.10.20)